The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	生き残った元特攻隊員たち ： 「特攻くずれ」の言説を中心に
Author(s)	西村, まりな
Citation	日本学報. 2020, 39, p. 52-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85165
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『日本学報』第39号（2020年3月）

【卒業論文】

生き残った元特攻隊員たち

「特攻くずれ」の言説を中心に

西村　まりな

要旨

本論文は，アジア・太平洋戦争の敗戦を経て復員した元特攻隊員について，「特攻くずれ」という言説に焦点を当てながら，彼らへのまなざしや，彼らを取り巻く戦後社会の一端を明らかにし，そのような時代を彼ら自身がどのように生きたのかを考察したものである。占領期の新聞報道や雑誌，元特攻隊員の手記，および元特攻隊員への聞き取り調査から事例を整理し，項目ごとに分析と考察を行った。

まず第1章では，占領期の新聞報道において，復員軍人を温かく迎え入れることが呼びかけられ，彼らは「新生日本」の担い手として期待されたことを読み取った。とりわけ，元特攻基地の「再生」と元特攻隊員の「再出発」が「新生日本」の建設に重ねられて表象されていった一方で，同時期において犯罪者へと転落した元特攻隊員は「特攻くずれ」として報じられた。

第2章では，「軍神」から転落した「特攻くずれ」をめぐって，世間の人々の間でどのような言説が展開されたのかを，当時の雑誌や新聞の読者投稿欄，手記などから検討した。「特攻くずれ」は，闇屋をさまよう「野良犬」のイメージと結びつき，社会や学校からは「異物」として排除された。一方で，「純粋な若者」が権力者に翻弄され転落するという状況に同情を向ける声もあがっていたことがわかる。

第3章では，そのような「特攻くずれ」という言説が生まれ，全国的に共有された社会背景について考察し，当事者がそのような世の中をどのように生きたのか検討した。戦後社会にいることが想定されなかった元特攻隊員という存在は，復員兵の中でも敗戦の屈辱や無念が向けられる対象になっていたことが考えられる。そのような圧力は，元特攻隊員を戦後数十年にわたって沈黙させた。また，そのような世論が反動的に「特攻くずれ」を生み出したことも明らかとなった。彼らは，自身の存在を懸けて，自身を排除しようとする社会に抗い，「特攻くずれ」としてふるまったのだった。

目次

はじめに
第1章　占領期の新聞報道からみる元特攻隊員像
　第1節　復員軍人の帰郷と期待される「新生日本」
　第2節　特攻基地の「再生」と元特攻隊員の「再出発」
　第3節　罪人に転落する「特攻くずれ」たち
第2章　「特攻くずれ」をめぐる言論
　第1節　闇をさまよう「野良犬」
　第2節　「くずれ」の排除と「くずれスタイル」

の出現
第3節　「特攻くずれ」への悲哀と同情
第3章　「特攻くずれ」言説の背景と元特攻隊員たちの想い
第1節　「特攻くずれ」のメディアへの登場と検閲の問題
第2節　「異物」への非難と元特攻隊員の自責・沈黙
第3節　反動としての「特攻くずれ」
おわりに
参考文献一覧

はじめに

アジア・太平洋戦争において，日本軍は1944年以降，戦局の悪化にともなって組織的に「特攻」を推進した。爆弾もろとも敵の戦艦などに体当たりするこの戦法によって，1年たらずの間に，航空機による突撃だけで約4000人の若い隊員たちが亡くなった[1]。そのような状況下で，戦時中，特攻隊員たちは新聞で連日のように「軍神」「神鷲」などと賛美される存在となっていた。

1945年8月14日のポツダム宣言受諾，15日の玉音放送，9月2日の戦艦ミズーリ号での降伏文書調印を経て，日本は敗戦した。「飛行機乗り」にあこがれて陸軍特別幹部候補生に入隊した中村五郎は，特攻隊員として朝鮮の大田から前線基地へと向かう日，出陣式の途中で敗戦を知って泣き崩れたという[2]。日本の勝利を疑わなかった彼にとって，玉音放送を聞いた時が「人生で一番悔しかった瞬間」として73年もの間刻み込まれている。また，父の反対を振り切って予科練に入隊した西村辰三は，8月15日になっても正式な辞令を聞くことはなかった[3]。18日に敵部隊出現の知らせを受け集合したときに初めて，索敵から帰ってきた上官から終戦を告げられた。「俺らが出て行ったら勝てたんちゃうかって，そのときは思ってんけど」と笑いながら当時を振り返る[4]。

このようにしてそれぞれが敗戦を経験しながら，生き残った特攻隊員たちは順次復員した。しかしながら，彼らのなかには「特攻くずれ」「予科練くずれ」と呼ばれる者が現れた。「特攻」に関する先行研究の中にもこのような風潮に言及しているものがある。例えば西川吉光［2009］は，生き残った特攻隊員たちが，戦後民主主義社会に溶け込めず，嘲笑と蔑視の対象になったと述べ，元隊員の精神も行動も荒んでいく中で価値観の逆転と社会の冷視にさらされ，自暴自棄となって犯行に走った者もいたと指摘する。また，福間良明［2007］は，元特攻隊員たちにとって敗戦後の社会が「往々にして陰鬱なもの」として映ったこと，元特攻隊員たちがしばしば強盗や殺人を犯したことを，回顧録や一部の新聞報道から示し，彼らのこうした言動が，元特攻隊員が「特攻くずれ」「予科練くずれ」と蔑まれる風潮を生んだと指摘した。さらに，復員軍人の戦後史を叙述した吉田裕[2011]は，復員兵が社会から冷遇された事例を挙げ，特に戦前・戦中はある種のヒーローだった零戦パイロットが大きな反動を被ったと述べた。

なお戦場から復員した兵士が帰郷した後に別人のような振る舞いをする事例は，現代においては，戦争神経症などをはじめとしたPTSDに関する精神医学，臨床心理学の分野からの研究が盛んである。また，日本軍内においても戦時中から戦争神経症を発症するものが多数いたことは，浅井利勇，清水寛，細渕富夫，中村江里らが当時の陸軍精神病院の「病床日誌」を分析し明らかにした。特攻隊員についても，すでに戦中から逸脱した行動をとる者がいたことがわかっている[5]。現代においては，彼らの言動もそうした「症例」のひとつとして説明されうると考えられる。

しかし，当然ながら敗戦直後の日本ではそのような理解は共有されていない。そしてこれまで「特攻くずれ」という言説は，なかば戦後社会の「ならず者」を象徴するもののように議論されてきた[6]。戦時，敗戦，占領，戦後を生きていた人々は，「軍神」が「特攻くずれ」へと変貌する状況をどのようにまなざしたのだろうか。逆に「特攻くずれ」や彼らを含む元特攻隊員はどのようにふるまい，何を思って生きてきたのだろうか。

本論文では元特攻隊員の手記，占領期の新聞・

雑誌の報道，さらには筆者自身による聞き取り調査から，「特攻くずれ」たちの心情や彼等へのまなざしを個別具体的に記述したい。そしてこのように敗戦後に展開された元特攻隊員たちをめぐる言論に注目することで，「特攻くずれ」がどのような要因・社会背景のもと言説化されたのかについて迫ることを試みる。

そこで，まず第 1 章では，占領期の新聞報道において，元特攻隊員がどのように取り上げられてきたのかを検討する。ここで取り上げるのは，当時主要な全国紙であった『朝日新聞』東京版，『読売新聞』東京版，『毎日新聞』東京版[7]と，国立国会図書館憲政資料室が所蔵するプランゲ文庫資料[8]に含まれる地方紙である。次いで第 2 章では，元特攻隊員の手記や占領期の雑誌において，特に「特攻くずれ」をめぐってどのような言論がなされてきたのかみていく。そして第 3 章では，筆者がおこなった聞き取り調査やこれまで示した事例を根拠に，「特攻くずれ」という言説が生まれた要因を考察する。

なお，「特攻くずれ」は差別的な意味を含む言葉であるが，本論文では学術的な用語として鍵括弧付きの表記で扱うものとする。また，本論文全体において地の文では「特攻くずれ」と示したが，それ以外は原典の表記を尊重した。引用した文章については，必要に応じて旧字体は新字体に改め，適宜句読点等を追加した箇所があることも併せて断っておく。

第 1 章　占領期の新聞報道からみる元特攻隊員像

敗戦後，元特攻隊員を含む陸海軍の兵士たちは随時復員した。そして，当時の新聞紙上では彼らの社会復帰に関してさまざまな言及がなされた。また，復員を終え故郷に戻った元特攻隊員の「その後の姿」は，占領期を通して断続的に報道されることになる。本章では，占領期の新聞紙上において，元特攻隊員が「平和的開拓者」と「特攻くずれ」という対極的な 2 つのイメージにおいて報じられたことをみていきたい。

第 1 節　復員軍人の帰郷と期待される「新生日本」

敗戦の時点で日本本土には 436 万人，海外には 353 万人，合計で 789 万人もの陸海軍が配備されており，戦争が終わると彼らの復員が日本政府の大きな課題となった[吉田 2011：p.21]。本土の兵士たちは 8 月下旬頃から復員を開始し，帰郷していった[9]。柳井和臣は，上官の許可をもらい，8 月 20 日に「零戦」に乗って宮崎県の冨高基地から山口県に帰郷した。これが彼にとって最後の「零戦」搭乗日であった[10]。その際，原爆投下で焼け野原になった広島の上空を通過して，その惨状に言葉を失ったという。

その頃『朝日新聞』では復員兵の帰還に際し，「兵の心は一億の心：他人事ではない：優しい思遣りで迎へよう」という記事が掲載された[11]。復員兵たちの胸が憂悶に閉ざされ，足取りは重く，うなだれて靴音が低く響いていることを伝え，「ともすれば暗い虚無に落ちようとするその心に，細々ながらも温い灯を点じてやるのは，われら銃後に残ったもののつとめ」と読者を諭す。

その記事のなかで，「帰りゆく将兵のなかに，まさに身を捨てて敵艦船に突入せんと待機してゐた特攻隊員もゐる。さう考えただけでわれ等の迎へる眼差しは温かに和むはずである」と，特攻隊員についても触れられている。ここに，復員兵のなかでも特に特攻隊員が銃後の人々の感情を揺るがす象徴的存在としてあえて引き出されていることが読み取れる。

一方で，「帰還将兵に「世間の風は冷たい」と思はせるものがありとすれば，美しき大和島根もたゝ一塊の土にすぎぬのではないか」と問いかけ，互いに温かい血を通わさずして「新生日本」はないと提言する。

翌日の『朝日新聞』でも，「復員輸送は真心で」という記事が掲載される[12]。記事によると，国鉄は「復員は真心をこめて温く」「復員輸送は感謝をこめて」という標語が書かれたポスターを掲示し，優先切符の発行や休憩所の設置を行うことを決定した。このように，兵士の復員が始まって間もな

くの時期には，兵士たちの気持ちを考慮して彼らを丁寧に迎え入れることが配慮された。それと同時に，この時点で彼らへの冷遇もまた懸念されていたことがわかる。

一方，25日には昭和天皇の「陸海軍人ニ賜リタル勅諭」も発表された。そこには，「汝等軍人其レ克ク朕カ意ヲ体シ忠良ナル臣民トシテ各民業ニ就キ艱苦ニ耐ヘ荊棘ヲ拓キ以テ戦後復興ニ力ヲ致サムコトヲ期セヨ」という文言が含まれていた。ここから，復員軍人が社会復帰し戦後復興に尽力することが望まれているのが読み取れる。またその約一週間前には，文部大臣大田耕造も日本中の全学徒に向けて激励文を寄せた[13]。戦線や工場に動員された学徒に感謝と謝罪の言葉を送るものの，「我等の今後の生活は苦難に満つ。学業も亦荊棘の径を開いて行くのである」と厳しい現実に言及する。そして「諸君の重任は昨日までの敢闘を以て終ったのではない」「諸君の素晴らしい再出発を期待する」と締めくくられている。このように，復員者に対して復興の担い手としての「再出発」の役割が課されてゆく。

以上をふまえると，敗戦直後の日本において，まず国民には復員軍人を温かく迎え入れることが求められ，復員軍人には「新生日本」の担い手となることが望まれたことがわかる。また，旧学徒兵を含め，特に次世代の日本を担う若者たちには，日本の科学技術や学問の発展を率いていくような「再出発」が期待されたといえよう。ここに象徴的に取り込まれるのが元特攻隊員という存在である。次節では，特攻基地が生まれ変わって新たに意味付けされていく様子，そして元特攻隊員が「平和の開拓者」として取り上げられていく状況を新聞報道からみていきたい。

第2節　特攻基地の「再生」と元特攻隊員の「再出発」

筆者は，玉音放送が流された1945年8月15日以降の新聞記事から，元特攻隊員の「その後の姿」を報じる記事を調査した。そこでまず着目したキーワードが，特攻基地の「再生」と，元特攻隊員の「再出発」というものである。

さっそく，前者についてみていきたい。まず，1945年11月7日の『朝日新聞』の記事にて，予科練の体操場が開墾される様子が報じられた。1945年12月7日に『朝日新聞』の記事にて，かつての基地である木更津空港の大地で開墾する「忘れられた特攻隊」30余人の様子が述べられている。下の表1で示す通り，このようにかつての特攻基地が農耕地として開墾される様子を取り上げた記事は1946年から1948年にかけて，戦中に特攻基地が置かれていた地域の各地方紙で断続的に現れる。特攻基地は，爆弾や軍用機が集結し，多くの青年達を死にゆかせて敵国民を殺した戦争の拠点である。土を掘り返して耕し農作物の種をまくという行為は，それまでの「特攻基地」を更地にし，「人を殺す」ための土地から「人を生かす」ための土地へとその存在意義を塗り替える，意識的かつ積極的な取り組みであったといえよう。それは，「夏草」「秋の稔り」「麦の穂」「青葉」といった生命の芽吹きを感じさせるようなキーワードが記事の見出しに用いられていることからも読み取れる。また，それが基地の所在地を中心とした地方紙で多く報じられている背景には，近隣住民に向けての地域イメージの向上が意図されていると考えられる。実際に，鹿屋基地が耕地へと開墾されていくことを扱った記事では「基地鹿屋がいま新生日本に食糧増産の基地として更生するその姿には敗戦の苦悩を踏み越えてゆく民族興隆の力強い足取りが感じられる」と述べられている。

農耕地のほかにも，「返り咲く特攻基地：音戸町に廣島水産専門校」と，特攻基地が学校へと姿を変えることを扱ったものがある。また「生れ変る特攻基地：川南台地（宮崎）に文化村建設：村の中央には劇場も建設」という記事では，特攻基地が文化や芸術の発信の拠点として使われるようになることが伝えられる。そのほか，出水飛行場が豆畑や麦畑へと変わり「平和の使者」である鶴が遊びまわっていることを写真付きで説明する記事もある。このように，特攻基地が新しい用途のために生まれ変わるという出来事は，その土地から戦争のイメージを脱色し，新たに平和的な意味を

1945	11月7日「予科練体操場を開墾」『朝日新聞』東京，朝刊，第2面 12月7日「鍬を揮ふ「特攻隊」」『朝日新聞』東京，朝刊，第2面
1946	2月22日「九州あちこち：特攻基地の農園化：立候補認書交付」『佐賀新聞』第2面 5月13日「返り咲く特攻基地：音戸町に廣島水産專門校」『中国新聞』第2面 5月27日「新生八丈だより：夏草しげる夢のあと」『読売新聞』東京，朝刊，第2面 8月15日「つはもの共の夢の跡：秋の稔りに甦へる：鉄の鎧の取りはづし“漁業久里浜”へ」『読売新聞』東京，朝刊，第2面 8月16日「トロール船の基地へ：大神村の元海軍特攻基地を活用」『大分合同新聞』第2面 8月21日「耕地へ変貌する特攻隊基地……鹿屋」『九州タイムズ』夕刊，第1面 10月8日「変貌する陸軍用地」『九州タイムズ』夕刊，第1面 12月27日「特攻基地はむかしの夢：大村飛行場を開墾：農耕地として再生のスタート」『長崎民友』第2面
1947	1月6日「ひろがる耕地に鶴群の訪れ：平和の春によみがえるもと出水飛行場」『南日本新聞』第2面 2月21日「今どうなってる：県下各地の特攻基地：三基地：小飛行場：賠償工場」『大分合同新聞』第2面 5月25日「またれる稔りの秋：元宇佐航空隊用地開墾進む」『大分合同新聞』第2面 6月21日「生れ変る特攻基地川南台地（宮崎）に文化村建設：村の中央には劇場も建設」『九州タイムズ』夕刊，第2面
1948	5月17日「麦の穂に苦悩を洗う原始生活：要塞を菜園に：田島岳に元特攻隊員一家：平和の開墾者」『佐世保時事新聞』第2面 6月20日「どろんこの元将軍や教授連：不毛地に汗の三年・今じゃ希望の自作農：大力洗の開拓村を見る：飛行場跡に大豆の青葉」『九州タイムズ』夕刊，第2面

表1：元特攻基地の「再生」を扱う記事

付していくという点で，「非軍事化」が目指された当時の日本にとって象徴的な出来事であったと考えられる。また，それが日本自体の「再生」を具体的に根拠づけるものとして発信されていくことが読み取れる。

そして次に注目したいのが，元特攻隊員個人が新たな人生を歩み始めていることを取り上げた記事である（表2参照）。例えば，1946年2月21日の『佐賀新聞』では，元特攻隊員305人が佐賀県内に居住し，そのうちの約半数は農民として生計を立てていると報じられた。また，1946年8月20日の『読売新聞』の「泉」欄や同年12月16日の『西日本新聞』では，真珠湾攻撃に参加し「捕虜一号」になった酒巻和男が現在は農業に励み，結婚を機に大手自動車メーカーに就職することが紹介された[14]。真珠湾攻撃で戦死した他の兵士が「九軍神」として大々的に報道され崇められるなか，生き残って捕虜となった酒巻については当時名前も写真も一切取り上げられることがなかったということを考えると，特攻で生き残った者が穏やかに生活を営んでいる様子に注目されるのがいかにそれまでと異なる状態か想像できる。ほかにも，1947年1月7日には，『朝日新聞』『読売新聞』両紙において，息子を戦争で亡くしたアメリカ人夫妻からの資金提供によって渡米し，順調な留学生活を送る特攻隊員のことなどが取り上げられていて，これについては数年後に続報も出ている。

このように，元特攻隊員が戦後，新たに生業を見つけて暮らしている姿や，学業，商売に熱心に励んでいる様子に焦点を当てることで彼らの「健全な社会復帰」をアピールするとともに，彼らの生き様に日本の敗戦と復興を重ね合わせ，戦後日本の再生に希望を抱かせるような効果があったのではないだろうか。そして，この「再出発」の元特攻隊員像と，次節で述べるような「特攻くずれ」としての元特攻隊員像とが対比され，それぞれ極端な「元特攻隊員像」が生まれていったのではな

1946	1月27日「黒ダイヤに挑む特攻隊隊長：西杵炭鉱明朗譜」『佐賀新聞』第2面 2月21日「約半数が“土”と暮す：生き残った特攻隊県内に305名が居住」『佐賀新聞』第2面 7月29日「焼そば屋さんは特攻隊員：隻腕・別府銀座で大いに稼ぐ」『九州タイムズ』朝刊，第2面 8月20日「泉」『読売新聞』東京，朝刊，第2面 12月5日「珍しや何でも：元特攻勇士らの義侠商売往来」『中国新聞』第2面 12月16日「その後の捕虜一号：農業に励む酒巻元海軍少将」『西日本新聞』第2面
1947	1月7日「日本人へ奨学金1万ドル：元特攻隊員が米人の好意で初渡米」『読売新聞』東京，朝刊，第2面 1月7日「元神風特攻隊員に，米国人が一万ドルの奨学資金」『朝日新聞』東京，朝刊，第2面 3月20日「部隊長：その後：③：特攻隊員に祈る：山縣公のお孫さん：ニガ手はソロバンだよ」『新潟日報』第2面
1948	5月2日「疲れた人のため：別府の田中氏の社会奉仕」『大分合同新聞』第2面 9月19日「元特攻隊員の米国留学」『朝日新聞』東京，朝刊，第3面 12月28日「ララの山羊が取もって：引揚婦人，富農の青年ご結婚」『西日本新聞』第2面
1949	5月24日「生きていた軍神：鈴木元特攻隊長帰る」『佐賀新聞』第2面
1950	8月27日「渡米の特攻隊員：恵まれた留学生活，手記も出版」『読売新聞』東京，夕刊，第2面
1951	12月21日「子供に明るい未来を：読書会から遊園地へ大森：元特攻隊員の努力実る」『読売新聞』東京，朝刊，第4面

表 2：元特攻隊員の「再出発」を扱う新聞記事

いかと筆者は考える。

以上，本節で取り上げた事例から，戦後，元特攻基地が農耕地や教育的施設として「再生」し，元特攻隊員が人生を「再出発」していくという表象を新聞記事から読み取った。これら一連の報道によって，解体した特攻隊が，戦後の日本社会に希望をもたらす平和的存在として性質を変えていく様子が描き出されていることが明らかになったのである。

第3節　罪人に転落する「特攻くずれ」たち

前節では，占領期の新聞で取り上げられる記事から，元特攻基地が開墾を経て平和的に利用されることがアピールされ，そして元特攻隊員は「無害な」戦後の平和の開拓者として描き出されていくことを明らかにした。一方で，同時期にそのようなイメージとは対照的に現れたのが「特攻くずれ」という言説である。そこで，本節では，まず新聞報道において「特攻くずれ」という言葉がどのような場面で登場するのか，具体的な記事を取り上げながらみていきたい。

筆者の調査によれば，「特攻くずれ」という語の初出記事は，1945年12月16日の『朝日新聞』の「声」欄である。寄稿者は作家の志賀直哉で，「特攻隊として，予科練習生時代から特殊な精神教育を受けて来た青年達を，そのまま復員してしまった事は，政府として，無責任極まる措置であったと思ふ」と述べ，戦後価値観の一変した社会に放り出された元特攻隊員たちに対し同情を示しつつ，彼らが飲酒や女遊びといった「悪い習慣」を覚えて復員したことを指摘し，「かういふ青年達の再教育，その心境を青年らしい健全なものに還す特別な教育をもう一度やる責任が政府にはある」と主張する。

そのようななか，「今でもすでに「特攻隊くづれ」などいふ言葉が出来てゐるが，嘗て特攻隊に対し，何ともいひやうのない悲愴な感情を持った国民が今更，平気でさういふ言葉を口にし，また口にしないではゐられぬやうな事にはなりたくない」と，「特攻くずれ」という言葉が社会で用いられていることに触れ，そのような状況に苦言を呈している。

さらに，同月22日の『朝日新聞』の「声」欄には，この主張への応答が，復員軍人を自称する者によって投稿されている。投稿者は，「もし「特攻

くづれ」があるとすれば，それは彼等が受けて来た教育の罪よりも寧ろ現世相の罪だ。私は特攻隊員の再教育よりも，社会各自の再自覚を要望する。正しい社会世相を現出して始めて（筆者注：ママ），彼らも健全な青年として再出発し得るのではないか」と述べる。

このように，新聞紙上における「特攻くずれ」という言説は，彼らをそのように揶揄する社会に対する批判的な議論のなかで現れ，そこでは社会に対し元特攻隊員たちの境遇を慮ることが提言された。この記事からは，「特攻くずれ」という言葉が元特攻隊員たちに対する侮蔑的な呼称であることが認知されていながらも，敗戦から約 3 か月後にはすでに世間で共有されていたことが伺えよう。またそれは，戦争に巻き込まれたうえに敗戦を経て価値観の一変した社会で生きていかざるを得ない若者たちへの同情と，一方で「悪い習慣」に侵された彼らを「健全な」心身状態に戻すための再教育機関の必要性を問う文脈において現れたものであった。

その後も，「特攻くずれ」という言葉は新聞報道において現れる[15]。例えば 1945 年 12 月 27 日の『朝日新聞』には，「素質低下も多い：「特攻隊」に第一復員省談」という記事が掲載されている。

> 治安の乱れと共に復員軍人についてとかくの噂を生んでいる。殊に「特攻隊くづれ」といふいまばしい言葉すら流行している復員軍人の悪評について第一復員省当局では左の如く語った。
>
> 一部の悪い者がゐると言って，復員軍人全部を罪人扱いにすることは慎んで貰ひたい。
>
> 外地からの復員者は愛しの母國に温い心を想像して帰ってくるが，上陸した途端に冷たい批判の眼に接し，しかも中には家族の生死すら判らない者もある。そして激変の世相にまづ慨嘆，それがやがて自暴自棄に陥る。
>
> また特攻くづれなどと言はれるが，終戦前の航空隊員は急速に膨張し，素質も低下してゐたし，だから特別に攻撃隊などといっても一般と別段変ったところがない。

取材先が「第一復員省当局」と記されているが，この談義について記録した文書は国立公文書館の所蔵する復員省関連の資料にも残っていないことから，第一復員省が公式に発表した通達というわけではなく，朝日新聞が省の人物と接触して独自に得た証言と考えるのが妥当だろう。この記事からは，「特攻隊くづれ」をはじめとして復員軍人ら全体が社会から「罪人扱い」されている状況を第一復員省が認知していることが読み取れる[16]。

実際に，その後新聞記事では，「特攻くずれ」が「罪人」として現れるようになっていく。『読売新聞』の 1946 年 1 月 9 日で取り扱われている母子の心中事件においても，事件のきっかけとなったのが「神雷特攻隊くづれ」の四人組による強盗事件であったとし，事件の加害者の素性を説明するものとして「特攻くずれ」の呼称が現れているのである。

下記の表 3 で示す通り，1945 年末から 1946 年にかけては，「特攻くずれ」という呼称が必ずしも現れなくとも，特に元特攻隊員による犯罪が多い時期だったといえるだろう。1945 年 12 月 26 日の『読売新聞』には「元特攻隊員が追剥」という事件記事が載っており，その犯人は「予科練特攻隊にゐたといふ不良少年」と，その出自に触れている。同日の『朝日新聞』には「特攻隊員，辻強盗に転落す：悪友に誘はれて；泣いて語る「罪の心境」」という記事があり，『毎日新聞』でも同じ事件が報じられている。さらに，年明け早々には 13 人組の強盗団が検挙された。犯行の中心人物 3 人が元特攻隊員で，その他 10 人も前科なしの 20 歳前後の若者だったという。その後も元特攻隊員による犯罪は断続的に発生してゆく。

1946 年 12 月 11 日の『九州タイムズ』では，同年 10 月に発生した「特攻がえりの復員生徒」による教師殴打事件が取り上げられ，「特攻隊や志願兵育ちの悪い傾向を身につけた復員学生の存在」や「復員生徒を中心とする一部生徒の不謹慎」が横行していることに言及がなされた[17]。同月 17 日には，大分でも電車乗客専門のスリ団が逮捕され，その団長が元特攻隊員であったこと，さらに 24 日

には別のスリ団が逮捕され，時価10万円の窃盗をはたらいたことが報じられている。これらの記事の題目にも現れるように，戦中は神聖な存在であった特攻隊員が戦後は犯罪者に「転落」するという状況が，当時の社会に「特攻くずれ」という言説を浸透させていったのではないだろうか。

さらに，1947年5月30日には『読売新聞』において「特攻隊崩れの人情強盗？」という記事が示されている[18]（[ ] 内は引用者による加筆）。

> 28 日夜八時ごろ強盗の被害を一夜過ぎてから浅草署へ届け出た人があった。この被害者は大東ク浅草日本堤一の〇〇さんで［,］17日夜十時ごろ何れも27，8［歳の,］紺の上下を着た三人組強盗が押入り，主人と次男△△君にピストルようのもので脅迫したが，賊の一人がつと仏壇の中に飛行服を着た戦死者の写真を見て「これはだれだ」といい〇〇［主人の名］さんが「これは北支で戦死した長男だ」と答えると仏壇の前に座り一礼してから「おれ達も特攻隊の一員だった，このまま帰りたいが強盗になるのも社会が悪いからだ，少しでも金を借してくれ」と〇〇［主人の名］さんが出した三万円の金のうち三千余円を取り［,］強奪したオーバーを返し衣類二点を持って「警察へいくんもいいが，裏も表も仲間がいるから朝にしろ」と逃走，〇〇［主人の名］さんは強盗にも涙ありと一夜たってから届けたもの。

この記事は，ほかの事件記事とは少し性格が異なり，「特攻隊崩れ」たちへの悲哀や同情を誘う書き方がとられているように思われる。「特攻隊崩れ」が戦死した仏壇の写真の中の男性への敬意を示しながらも金を要求し，差し出された金の一部のみと衣類を持って逃げたというところに，復員後の犯人の切実な生活の困窮が反映されているといえよう。それに対し，被害者の主人が戦死した息子の姿と重ね合わせて「強盗にも涙あり」と同情を寄せたように書かれていることが読み取れる。

その後も，「特攻くずれ」による犯罪は1950年代前半まで報じられた。1948年1月11日の『佐世保時事新聞』では「特攻くずれ悪事」という題目のもと長崎県で「特攻くずれ」が中学生に恐喝を働いたことが報じられた。1948年3月20日の『佐賀新聞』においても，「衣料集団強盗挙る：犯人は海軍特攻隊くずれ」との題目で，衣料品小売組合からトラックで配給衣料品4千点が盗まれたことが報じられた。1949年に入ると，覚せい剤「ヒロポン」が「航空隊勤務の連中や特攻隊の生き残り」によって持ち帰られたことで，若者を中心に学生にまで横行していることが懸念されていく[19]。

1950年代に入っても，元特攻隊員による犯罪が報道された。1950年7月29日の『読売新聞』に奥羽線三関駅列車暴走事件で元駅員ら2名を逮捕したというものがあり，容疑者のひとりについて「〇〇中学卒業の予科練崩れ」との説明が付されている。1952年7月10日の『読売新聞』でも，ピストルの売買をめぐる言い争いに端を発する殺人事件の報道で，その犯人の男について，「海軍予科練に入隊した特攻くずれ，終戦後は素行がおさまらず，廿年末詐欺窃盗罪で東京簡裁から懲役八月――年六月の不定期刑を言渡されたほか廿六年五月横領罪で府中刑務所に服役した」と書かれている。

ここまで元特攻隊員による犯罪を概観し，彼らが加害者として報じられる際に「特攻くずれ」という呼称で言及される場合があったことを確認した[20]。このような一連の報道によって，神様から転落し社会から逸脱した「罪人」としての「特攻くずれ」の言説が強化され，社会に広く発信されていったものと考えられる。

以上，本章では，占領期の新聞から，復員した元特攻隊員たちや元特攻基地が平和の象徴として表象された一方で，彼らが犯罪者へと「転落」する状況が「特攻くずれ」という呼称と共に報じられたことを見てきた。敗戦直後，復員軍人や学生は「新生日本」の担い手として期待されたが，そのなかでも，とりわけ象徴的なのが元特攻基地の「再生」や元特攻隊員の「再出発」であった。軍国主義日本が平和的に生まれ変わっていく様子に焦点が当てられた一方で，それとは対照的に，戦

1945	11 月 9 日「内相を襲う」『読売新聞』東京，朝刊，第 2 面 12 月 16 日「声：特攻隊再教育」『朝日新聞』東京，朝刊，第 2 面 12 月 22 日「声：復員者諸兄へ：温い心で迎えよ：要らぬ再教育」『朝日新聞』東京，朝刊，第 2 面 12 月 26 日「元特攻隊員が追剥」『読売新聞』東京，朝刊，第 2 面 12 月 26 日「特攻隊員，辻強盗に転落す：悪友に誘はれて：泣いて語る「罪の心境」」『朝日新聞』東京，朝刊，第 2 面 12 月 26 日「復員兵士に冷たい世相　2 人組少年辻強盗，捕えてみれば元特攻隊員が悪の道」『毎日新聞』東京，朝刊，第 2 面 12 月 27 日「素質低下も多い：「特攻隊」に第一復員省談」『朝日新聞』東京，朝刊，第 2 面
1946	1 月 4 日「悪の主役は 3 神鷲：13 人組強盗捕わる」『読売新聞』東京，朝刊，第 2 面 1 月 5 日「元特攻隊員ら十三人強盗」『大分合同新聞』第 2 面 1 月 9 日「強盗へ死の抗議」『読売新聞』東京，朝刊，第 2 面 1 月 10 日「呪縛された特攻精神：日ごと基地の無謀な興奮：神鷲はなぜ転落したか」『読売新聞』東京，朝刊，第 2 面 1 月 13 日「声：特攻くづれ」『朝日新聞』東京，朝刊，第 2 面 1 月 13 日「転落の復員軍人を聖上・深くご憂慮：復員省・異例の上奏文」『朝日新聞』東京，朝刊，第 2 面 2 月 25 日「米麦を狙って“掛れ”元特攻隊員らの貨物抜取団検挙」『読売新聞』東京，朝刊，第 2 面 6 月 23 日「チンピラ強盗団捕はる」『読売新聞』東京，朝刊，第 2 面 12 月 11 日「ひねくれた特攻精神」『九州タイムズ』第 1 面 12 月 17 日「電車乗客専門のスリ団検挙：若い元海軍特攻隊員が団長」『大分合同新聞』第 2 面 12 月 24 日「時価十万円の窃盗を告白」『大分合同新聞』第 2 面
1947	4 月 6 日「派出婦殺しは予科練の首席」『朝日新聞』東京，朝刊，第 2 面 4 月 8 日「連続 3 晩，ピストル強盗：予科練出の鉄道員」『読売新聞』東京，朝刊，第 2 面 5 月 30 日「特攻隊崩れの人情強盗？」『読売新聞』東京，朝刊，第 2 面
1948	1 月 11 日「特攻くずれ悪事」『佐世保時事新聞』第 2 面 3 月 20 日「衣料集団強盗挙る：主犯は海軍特攻隊くずれ」『佐賀新聞』第 2 面 5 月 28 日「高校生が窃盗団」『読売新聞』東京，朝刊，第 2 面 11 月 25 日「特攻教育を呪う少佐強盗に転落：思想の惜敗を嘆く」『熊本日日新聞』第 2 面
1949	2 月 10 日「元巡査ら不良団挙る」『日向日日新聞』第 2 面 4 月 15 日「石油で千六百万円」『時事新報』第 2 面 5 月 9 日「夜の特攻隊にもてる覚せい剤：金詰りに売行き好調の珍現象」『南海タイムス』第 2 面 8 月 29 日「悪魔の霊薬ヒロポン考証学：草分けは特攻隊：今は学生までマニア」『新愛媛新聞』第 2 面
1950	7 月 19 日「気流：特攻隊くずれ」『読売新聞』東京，朝刊，第 2 面 7 月 29 日「元駅員ら二名逮捕：三関事件の容疑者」『読売新聞』東京，朝刊，第 3 面
1951	
1952	1 月 17 日「予科練くずれの強盗」『朝日新聞』東京，夕刊，第 2 面 7 月 10 日「“早乗りの辰”山下：特攻くずれ近藤：下十条駅殺人事件」『読売新聞』東京，朝刊，第 3 面
1953	
1954	10 月 27 日「高橋ドヤ街の特攻隊も」『毎日新聞』東京，夕刊，第 3 面

表 3：元特攻隊員による犯罪を扱う記事

後の日本社会で罪人に転落する「特攻くずれ」としての元特攻隊員像が描き出されて行く過程をみてきた。そして，先行研究でも論じられているように，後者が元特攻隊員の戦後の姿として言説化されていく。

それでは，同時代を生きた人々は，「軍神」の転落をどのように見たのだろうか。また，かつての「軍神」たちはそのような社会をどのように見たのだろうか。次章では，元特攻隊員による手記や占領期の雑誌等から，「特攻くずれ」に対する社会のまなざしや彼らに関する言説をより詳しくみていきたい。

第2章　「特攻くずれ」をめぐる言論

占領期には，犯罪者に転落する「特攻くずれ」をめぐって，雑誌や新聞記事の読者投稿欄においても議論が展開された。また，「特攻くずれ」を題材にした映画がヒットを遂げることもあった。当時の人々は「特攻くずれ」をどのようにまなざし，当事者である元特攻隊員たちはそれにどのように向き合ったのだろうか。以下では，国立国会図書館憲政資料室が所蔵するプランゲ文庫資料や元特攻隊員について記された書籍等から事例を抽出し，①「野良犬」という表象，②排除の対象としての「特攻くずれ」，③「特攻くずれ」への同情という点に焦点化し，分析した。

第1節　闇をさまよう「野良犬」

親兄弟に訣別し　恋しい人を諦めて
死を待ち　煙草を吸うことも覚えた
酒もたらふく飲んだ
「太く短く」このスローガンを掲げて
方埒をして俺達だった　然し今は
宿無しの野良犬に等しい
強盗をやった友もある　闇屋を詐欺を
かうしなければ食へぬからだ
“神鷲”転落して放浪者となる
あゝ　こんなになる位なら
死んだ方が体当りで死んだ方が
どれ程良かったか知れない
然しヤケになるのは止さう
生れかわった気で日本国再建の特攻隊となろう［『巷の声』第9号：p.11］

これは，秋田県の男性から，「特攻隊員」という題名で寄稿された詩である。詩の一人称が「特攻隊員であった俺達」とされているが，この秋田の男性が実際に元特攻隊員だったのかどうかは不明である。戦時，敗戦，放浪者への転落という自らの姿を投影したものなのか，それともそうではないがあえて彼らに擬して心情を表現したのかによって，特に最後の2行が単に意志なのか，元特攻隊員への呼びかけを含意しているのか等，読み方が変わってくるだろう。また，この詩のなかには第1章で新聞記事から読み取った「転落」のイメージと，「再出発」の両方のイメージがみられることがわかる。そのようなことを念頭に踏まえたうえで，ここでは「宿無しの野良犬に等しい」「放浪者」という表現に注目したい。

この「野良犬」という言説は，「特攻くずれ」と関連づけられながらほかにもみられる。たとえば，次のような「小咄」である。

野良犬が集まって，食糧不足でやりきれないから集団強盗にでもなって飼犬を襲撃しようという相談。一体お前は何をしていたと問えば，痩せたセパードが俺は復員軍人だ。毛皮の汚れたのが，俺は特攻くづれだといふので訊いてみると，畜犬供出の時犬殺しの手から逃出した奴だった。［『月間読売』第4巻第3号：p.8］

この「小咄」は，野良犬たちの擬人化と，復員軍人や「特攻くずれ」の「擬犬化」とが巧みに盛り込まれた文章であるといえよう。話のオチは，ある野良犬が「犬殺し」から逃げて殺されるのを免れたという意味で「特攻くずれ」を称していたという点である。しかしながら「集団強盗になっ

て飼い犬を襲撃しよう」と野良犬が集まる部分には，第1章でみてきたような「特攻くずれ」による犯罪が皮肉られているし，彼らが復員軍人や「特攻くずれ」を名乗っていて，あえて「野良犬」というモチーフを使ったというのも意図的なことであろう[21]。

また，1949年には，黒澤明監督映画『野良犬』が公開された。この作品は，夏のある日，汽車の中でピストルを盗まれた若い刑事（三船敏郎）が，ピストルの闇取引の現場などをあたりながら，犯人（木村功）を追い続ける物語である。この映画の中では，闇屋が立ち並ぶ闇市の様子が印象的に映し出され，そこには復員兵の姿も見られる。さらに，刑事も犯人も復員兵で，小倉史によると犯人のほうは「特攻くずれ」という設定だという［2012：p.55］。両者が復員列車のなかでリュックを盗まれた経験を持ちながら，それをきっかけに一方は警察に，他方は犯罪者に転落するという点も物語のポイントだろう。川本三郎はこの映画を例に取り上げながら，黒澤明が「異物としての復員兵」にこだわった監督であると指摘する。戦争から帰ってきた者とそうでない者とのあいだには，戦争の傷をなお負っている者と，戦争を忘れて一刻も早く日常生活に復帰しようとする者との亀裂があり，同じ日本人のなかで大きな溝が生まれた。そうして，「復員兵」は明るい戦後社会の異物になっていく［1992a：p.330］。

このようにして考えると，こうした「異物としての復員兵」の最も極端な例が「野良犬」としての「特攻くずれ」であったといえよう。戦争で「死ぬべき」存在とされた特攻隊員が帰ってきて，闇屋をふらふらと渡り歩きながら生計を立て，頼みの綱もなくささくれた心情で生きている様子が，復員兵のなかでも最も象徴的なイメージとして創出されていったのではないだろうか。また，「野良犬」という比喩にはもはや人間でない獰猛さ，野蛮ささえも含まれていると考えられる。

なお，闇屋と特攻隊員が結びつきやすいものであったことは他の事例からも見てとることができる。次に示すのは，『ひろしま』という雑誌において，ある男性が自身と同じ汽車に乗り合わせた男を「闇屋に違いない」と判断し，彼について書いた文章である。つまり，自身の心情ではなく，その男の立場に「なりきって」記述したものである。汽車内には男が流行歌を歌う声が響き，その悲しい旋律から彼の身の上を案じて空想したのだという。

> 闇屋は辛かった。混む列車に荷物を持ってくるのは決して楽ではなった。彼は空威張りをしていた。それでなくてはとても割り込んで乗れるものではなかった。取り締まりがきびしい時にはつかまることもある。（中略）闇屋は厭であった。しかし，彼は思った。俺に闇屋以外に何が出来るというのだ。何をしろというのだ。俺は死ぬこと以外を習わなかった人間だ。一体生きて内地へ還ることを考えなかった人間だ。それが内地え（筆者注：ママ）還ってほうり出された。その日を食う道がどこにあるのだ。俺は闇屋をしなければ泥棒をするだけだ。俺が荷物を持って汽車に乗ると皆がジロジロ見やがる。俺を闇屋というのか。（中略）そして，今になって誰が俺を非難するのだ。［『ひろしま』：p.1］

もちろん，汽車で出会った男が闇屋の男なのか，さらに特攻隊員だったのかはわからない。しかしながら執筆者が闇屋に向かう若い男性を見て，その歌声を聞いただけでこのような空想が浮かんだということは，執筆者にとって「闇屋に向かう学生」が「特攻くずれ」のイメージと典型的に結びつくものだったということだろう。また，後に「あゝしかし彼は喪家の犬となった」と続くように，ここにも「野良犬」のイメージに近いものが見て取れる[22]。

このようにみていくと，復員兵のなかでも特に元特攻隊員が「野良犬」として表象されていることがわかる。また，『月間読売』の「小咄」に関しては，それが笑い話の題材として用いられている点にも，それが滑稽なものとして表現されているということができるのではないだろうか。軍神でありながら「死ぬべき」とされ，生きて帰ってく

ることが想定されていなかった（あるいは，想定されてはならなかった）特攻隊員が，帰ってきた。つまり，戦時中に「消える」存在であり，戦後社会にいるはずのなかった元特攻隊員が，いる。その点こそが，闇屋に集う「異物としての復員兵」のなかでも，「野良犬」とされた元特攻隊員が極端に典型的な例として現れる要因であろう。

第2節　「くずれ」の排除と「くずれスタイル」の出現

作家の童門冬二は，「死への恐怖などとっくに克服した少年死刑囚が，無罪放免になったのである。わたしは十七歳だった。そしてこの日からまた新しい地獄が始まった。いわゆる「予科練くずれ」になったわたしはヤミ市（ブラックマーケット）の漂流者になった。安酒とデン助賭博で毎日を送った。金がなくなって家に戻り，養母のタンスをかきまわして金を盗んだ」[2000：p.89] と当時を振り返る[23]。このように「特攻くずれ」のなかでも特に「予科練くずれ」と呼ばれる若者が現れた。

> 中学校には，かつて「祖国の危機を救うために愛国の至情もだし難くペンを操縦桿にかえた」とほめそやされた予科練や飛練からの復員生徒がもどってきた。彼らは校庭でタバコをすい，教師に「よくも，予科練に行かせたな。ただではすまんぞ」とすごむのである。学校当局は，あわてて復員生徒を下級生から離して，戦時中の武器庫を改造した教室に閉じこめた。「予科練帰り」とか「予科練くずれ」とか呼ばれた彼らは，町で喧嘩したり，闇屋の下働きをしながら，2，3年もしないうちに社会にとけこんでしまったのである［山本明 1986：pp.65-66］。

はじめに触れたように，先行研究において「特攻くずれ」に言及される際には社会全体において彼らが蔑視され冷遇されるという論点がもっとも着目されてきた。しかしながら，この事例からは，学校現場においても居場所を失った「予科練くずれ」の境遇がみえてくる。学校側は，彼らと向き合うのではなく，彼らを危険因子として認識した。そして，本来生徒を守る立場にある学校が「予科練くずれ」を腫物のように「排除」しようとしたことが，少なくともこの例から浮かび上がる。また，「2，3年もしないうちに社会にとけこんでしまった」とあるが，「予科練くずれ」による犯罪は報道されているだけでも1952年まで見られる。この点からも「排除」の圧力が彼らの存在を不可視化させてしまったのではないかと考えられる。

> 敗戦を境として，掌を返したように予科練帰りは世間から冷視され始めた。特攻くずれと呼ばれ，予科練をもじって与太連と馬鹿にされ嫌われるようになった。「貴様たちのような者がいたから，戦争に負けたのだ」ともいわれた。勝次郎（筆者注：松下が聞き取りを行った相手で，版画家の寺司勝次郎）は満18歳になったばかりであったが，15歳や16歳の予科練帰りも多かった。目標を喪って帰って来た彼らは荒れていた。飛行靴に戦闘帽，国防色の軍服に白マフラーという予科練スタイルで焼跡を徒党を組んでのし歩いた。毎日のように何かの事件が起きると，特攻くずれが犯人ではないかといわれた［松下竜一 1985：p.81］。

このように，「予科練くずれ」はあるときは侮辱され，あるときは理不尽に敗戦の責任を押し付けられるような役を引き受けさせられたことがわかる[24]。彼らは復員時に10代と若かったことも，そのような標的となりやすかった原因ではないだろうか。

ところで，事例をみていくと「予科練くずれ」にも「特攻くずれ」にも，象徴的なスタイルがあったことが読み取れる。「予科練くずれ」は「飛行靴に戦闘帽，国防服の軍服に白マフラー」，「特攻くずれ」は「復員の際に持ち帰った三種軍装に飛行靴を履き，首には富士絹のマフラー」で「帽子は飛行帽ではなく黒線一本入りの下士官用の艦内帽が幅を利かせていた」［永末 1995：p.2］とある

[35]。さらに，第 1 章第 2 節で示した佐賀県における衣料集団強盗事件の犯人は「現場に落ちていた海軍ボタンから足がついた」と説明されている。つまり，犯行に及ぶときにわざわざ自分の出自を表す服装を選んでいるということがわかる。こうした例から，彼らにとっての「くずれスタイル」は，彼らの「特攻くずれ」「予科練くずれ」としての自己表現の手段であったのではないだろうか。

それは，1959 年に『暮しの手帖』の「ある日本人の暮し」という連載で，一人の「特攻くずれ」が特集された記事からも読み取れる。

> 河原町の交番所で，巡査にどなられたときから，なにかが食いちがいはじめていた。どこがどう食いちがっているのかわからなかった。家にいても，町を歩いても，どこかで歯車が合わなかった。この町を最後に出て行ったときと，こうして帰った今と，町にちがいはなかった。その町に流れている目にみえないものが，いらだたせた。日の丸の旗で送ってくれた町は，いま汚れた飛行服と航空長靴を，さげすみの目で迎えた。ふん特攻くずれかという声を聞いた。俺のしてきたことが何がわるいんだと，おもい切りどなりたかった。意地でも，この飛行服と長靴をぬぐものかとおもった。闇屋の仲間に入った。ヤミ物資を自転車に積んで走った。ハンドルは操縦桿であった。ペダルは踏棒であった。目は雲の切れ目に目標を求めていた。夜は，わずかにもうけた金で，安酒をあふった。基地で毎夜丼一杯ずつ配給された航空ブドー酒でおぼえた味だった。[『暮しの手帖』第 51 号：p.159]

この事例からは，この「特攻くずれ」の青年が，自分の居場所であるはずの家や町において，どことなく感じる違和や孤独と葛藤している様子がうかがえる。そして，自分自身に向けられた「特攻くずれ」という蔑視にむしろ対抗するようなかたちで，意志を持って「飛行服と航空長靴」を身にまとっていたことが考えられる。

このように考えると，「特攻くずれ」は，自らを排除しようとする周囲からの圧力や蔑視に抗うように，「特攻くずれ」としてふるまうことがあったのではないか。それが，自身への風当たりの強い戦後社会において自己の生を主張するための手段だったのではないだろうか。

ただし，注意するべき点がある。1946 年 3 月の『アサヒグラフ』において，「うら悲しきファッション」として，町行く人々の服装について特集されているのだが，男性の服装について，闇屋と強盗が共々「白マフラーに半長靴」の特攻隊員になりすましているという状況が指摘されているのである。

つまり，特攻隊員という出自を持たない偽物の「特攻くずれ」も存在していたということが考えられる。このように「特攻くずれ」を装ったものの犯行が相次いでいて，それを当時の人々が視覚的にあるいは伝聞的に受け取ったとするならば，「特攻くずれ」という言説は本質的には曖昧なまま社会に広まっていったのではないだろうか。しかしながら，こうした「特攻くずれ」への批判は否応なく元特攻隊員が引き受けることになる。そして，元特攻隊員であれば誰もが「特攻くずれ」と批判されうる社会の風潮は，彼らをさらに社会から孤立させたと考えられる。

第 3 節　「特攻くずれ」への悲哀と同情

> 特攻隊の一人の君が強盗に落ちし報せは吾を哭かしむ

これは，『昭和萬葉集：巻七』所収の国定信忠による歌である。占領期には「特攻くずれ」に関して必ずしも批判的な言論のみが展開されたというわけではない。「特攻くずれ」は世間から悲哀や同情的なまなざしを呼び寄せた問題でもあった。また，第 1 章第 3 節で取り上げた志賀直哉による寄稿と同様に，「特攻くずれ」という言説を生んだ社会を批判するような議論もなされていた。本節ではそのような事例をみていきたい。

（富士宮で起きた覆面ピストル強盗の犯人 5 人が全員復員兵で，そのうち 2 人が特攻隊員だったという知らせを受けて）「おれにはそういう復員兵の気持ちはわかるような気がする。やられたほうには気の毒だと思うが，そうかといってそういう復員兵を責める気にもなれない。おそらく何もかも信じられなくなって，ふてくされてやぶれかぶれになっているのだろうと思う。おれだってあぶないものだ。いまはさしあたり親がかりで食うに困らないからこうしてじっとしているが，そうでもなければ，たとえそれが悪だとわかっていても，ずるずる引きこまれていって，そのうち何をしでかすかわかったものではない。強盗だってやりかねないだろう。おれはもう世の中のことを信じられなくなっているが，同時に自分も信じられなくなっている。（1945 年 11 月 26 日の日記）［渡辺 1983：pp.90-91］

この日記の著者渡辺清もまた，復員兵である。彼は自らが置かれた状況を通して，「特攻くずれ」を責められないと述べる。また彼は，自身も生活に困窮すれば犯罪者となりうることを想像し，その背景にある社会や自分への不信感を吐露する。自分も当事者になりかねない身として「特攻くずれ」たちに同情を寄せていることが読み取れる。

このように特攻くずれを含む復員軍人たちが，半ば当事者として彼らに思いをはせる例は少なくない。第 1 章第 3 節でみた志賀直哉の寄稿への応答もそうだが，新聞の読者投稿欄にはしばしば復員軍人から意見が集まった。例えば，1949 年 1 月 13 日の『朝日新聞』の読者投稿欄「声」では，「特攻くづれ」が特集され，復員軍人からの意見が取り上げられている[26]。

特攻隊員から辻強盗に転落の記事を見て遂に恐れていた事実の実現に涙泣きを得ない。昨日までは生き神ともいはれてゐたものが今日は破廉恥の一汚辱漢と化す。この転落に社会否無能為政者の罪を痛感せぬものがあらうか。人を責むる前に，まづ極悪の根源日本軍国主義に沸々たる激憤を感ぜざるを得ない。人々よ，この若者をかくあらしめた世間と民を飢しむる当局の懶惰をうつべきである。青年は常に純真である。純真を悪用しボロのごとく抛り出せしものを罰せよ。（雑誌編集者）

（前略）純真なるものが，一度最良なりと信じたる道の覆はれたるとき，それは堰を切ってうち流れたる洪水の如く，なす所を知らぬのである。われわれのこの気持をも察せず世の人々は「特攻くづれ」とか「転落者」とか言ふのである。今起りつつある数々の犯罪は，皆世間に対しての反発に他ならぬ。
世の人々よ，糺明よりも，先づ，この據り所のない心情を憐み，新日本建設のために青少年の信ずべき確固たる道を明示すべきである。（予科練復員者）

これらの事例をみてみると，投稿者たちは，「特攻くずれ」が本質的には「純真な若者」であるという点にこだわって主張している。彼らは，罪のない純真な若者が為政者や軍の年長者によって翻弄され犠牲になったという点に怒りを覚えていることが読み取れる。そこには，半ば自らの叫びとして，「特攻くずれ」が悪いのではない，彼らをそれほどまでに追い込んだ根源にこそ責任を負うべき義務がある，という思いが込められているのではないだろうか。

さらに 1950 年 7 月 19 日に『読売新聞』の読者投稿欄「気流」で「特攻隊くずれ」が取り上げられた際にも，投稿者は元特攻隊員であった[27]。彼は，ある作家の女性と実業家の男性が，朝鮮戦争の勃発に際し，新しい帰化法を制定し特攻隊くずれをアメリカに帰化させて国連義勇軍を制定することを提案したという同月 10 日の記事の一部に怒りを示した[28]。

（前略）“義勇隊を出せ！特攻隊くずれをアメリカへ帰化させろ，アハハ”とは，他人を嘲り笑う以外の何ものでもない。この言葉をみて驚き憤った元特攻隊員は無数にあろう。

われら青年は好きこのんで戦場に赴いたのではない。あの当時は一途に国家のためと思いこみ，学問を捨て親の目までぬすんで志願したのだが，戦いは破れ漸く命を永らえて帰還した。無残な敗戦の現実を前にして若い夢は砕き去られ戦争は永久にしてはならぬとの信念は胸にかたく凝っている。

それを今日なお，われわれをまるで腕力ざたを好む前科者のように取扱うS，B両氏らの如き軽薄インテリがいるため日本は世界から交戦国の悪名をきせられるのだ。どんな色目で見られていようとも，われわれはもう絶対に戦争には行かぬ！義勇隊応募などとは夢にも思ったことはない！B氏らよ，“きけわだつみの声”をあなたがたはどう鑑賞したのか？あの中にみなぎる戦争拒否と平和希求のパッションこそ元特攻隊員を含む知識青年一般の偽らぬ気持ちと知れ。（新潟・金山勇・元特攻隊員）

投稿者は「インテリ」たちの言論に批判的である。たしかに，占領期には「インテリ」たちによって「特攻くずれ」を含む復員軍人の行く先について議論されることがあった。例えば，『新文庫』における「世相よも山ばなし」という鼎談では，「混乱する世の中を眺めて先ず不穏なのはピストルを振り廻す青年が多くなったこと」として「特攻くずれ」が問題視された［『新文庫』第 1 号：pp.4-12］。また，『文明』における「復員青年の運命」という座談会でも，敗戦国日本の将来は復員青年の運命にかかっているとして，元特攻隊員を含む復員軍人が今後どのように生きていくべきかについて議論された［『文明』第 1 巻第 6 号：pp.39-49］。このような知識人たちの言論と当事者たちの心情の間には乖離があったことが想像できる。

また，復員軍人以外にも，彼らに同情を向けるものがいた。ある新聞記者は「よく特攻くづれ，という言葉を聞く。強盗や，たかり，かっ払い，その中にかつての特攻隊がいたというので，くづれという名を冠せられ排斥されている。誰から？社会から，一般人から，かつて彼等を讃え，敬い，あがめた人々からである。或は，すすめたり，煽ったりした人らである。ちょうど，胴上げにしてそのあげくドカンと落とされたようなものである」と「特攻くずれ」をめぐる社会の排斥的な風潮を綴ったうえで，「今更彼等を云々したくない。毀誉褒貶の彼方に，静かに眠らせ，そうして忘れさせ，忘れられたい希望を達してやりたい。瞑福を祈るしかない。少くも特攻くづれという言葉はなくしたい」と述べる［『国民講座』第 556 号：pp.19-21］。注目すべきは，この記者が少なくとも「特攻くずれ」という言葉をなくし，できることなら死んだ特攻隊員に対してもただ冥福を祈り，静かに人々の記憶から特攻を消し去りたいと望んでいるのである。戦前に特攻隊を崇めた人々が戦後になって彼らを「特攻くずれ」と罵倒するという状況が，この記者にとっては特攻隊員を揺さぶり翻弄しているように思われたのだろう。

前出の『朝日新聞』の「声」欄での「特攻くづれ」特集においても，女性の投稿から「特攻くずれ」に対する同情がみてとれる。

嘗ての日は神鷲とまでいはれた特攻隊員の名をもつ人々がまた勇戦奮闘して故郷へ帰ってきた軍人が，恐しい罪を犯して捕へられている。しかし，「悪友に誘はれて知らない間に手伝ひをさせられてしまった」といひ，厭な気持だったと烈しくむせび泣いたといふ十七歳の哀れな一少年の心境には胸を打つものがありました。（中略）
多年異郷で苦しみを戦って来られた軍人が，故国へ帰って見ればみなからは冷い眼で見られ，兵隊が負けたんだといふやうな態度で扱ったあの常時の国民の心をよく反省すべきではないでせうか。

この事例でも，投稿者の女性が 17 歳の少年の供述に「哀れみ」を感じたことが，「特攻くずれ」への自らの向き合い方を再認識する大きなきっかけとなったことが伺える。

このように，「特攻くずれ」に対する同情的なまなざしは，まず元特攻隊員の転落に対する悲哀が

起点となり，それが復員軍人らを中心に「叫び」として表れていった。また，そこには「特攻くずれ」を言説化し彼らを冷遇する社会に対する批判，ひいては政府や軍国主義への非難が表れていた。さらに，彼らが「純真な若者」であるという主張が，それらに根拠を持たせていったことが考えられる。

以上，本章では，「特攻くずれ」に関する具体的な言論を取り上げ，それを3つの観点から検討した。まず第1節では，「特攻くずれ」が「野良犬」として表象されたことを示した。またそれが，「異物としての復員兵」の最も極端な例として元特攻隊員があげられることに由来する可能性を検討した。次に第2節では，当時「特攻くずれ」に対し，彼らを学校現場や社会にとって悪影響を及ぼす存在として排除するようなまなざしがあったことを確認した。そのなかで，彼らにとって象徴的な「くずれスタイル」に言及し，それが彼らの自己主張の方法でもあったことを推察した。「特攻くずれ」たちは，周囲の人々に反抗的な態度をとったり，あえて「特攻くずれ」とわかる服装をしたりすることで，社会からの圧力や蔑視に抵抗した。ただし，それによって「特攻くずれ」を騙って犯行に及ぶ者もあらわれていたという点には注意が必要である。さらに，第3節では，犯罪者に転落する「特攻くずれ」に対し，新聞の読者投稿欄等にて彼らに同情したり，転落の責任を日本政府に求めて非難したりする者がいた。またその際，「特攻くずれ」たちが本質的には「純粋な青年」である点に注目されていることが読み取れた。

それでは，「特攻くずれ」という言説はなぜこの時期に生まれ，人々に共有されることとなったのだろうか。また，そのような社会を当事者たちはいかに生きたのだろうか。次章では，「特攻くずれ」の言説の背景や，その時代を生きた元特攻隊員たちの心情について，これまでに挙げた事例や筆者が元特攻隊員におこなった聞き取り調査から検討したい。

第3章　「特攻くずれ」言説の背景と元特攻隊員たちの想い

第1章で示したように，敗戦直後の日本において元特攻隊員は平和の担い手として期待され，表象されていた。その一方で，相対するような「特攻くずれ」という言説がどうして生まれたのだろうか。また，元特攻隊員たちはそのような言説を受け，どのように感じていたのだろうか。本章では，これまで示した事例から見えてきたことを整理しつつ，筆者が元特攻隊員たちにおこなった聞き取り調査の結果と併せて考察をしたい。

なお，はじめに触れたように，戦争を経験した兵士が罪を犯したり，自暴自棄になったり，精神を病んだりする問題は，近年では戦争神経症という観点から研究が進んでいる。本章では，あくまでも言説としての「特攻くずれ」がどのような要因や社会背景のもとで共有されていたのかという点に着目することを断っておく。

第1節　「特攻くずれ」のメディアへの登場と検閲の問題

「特攻くずれ」という言説が拡散されたことの最たる要因として考えられるのが，新聞報道である。筆者は，第1章第3節において，罪人へと転落する元特攻隊員を報じる際に新聞各紙が「特攻くずれ」「予科練くずれ」という呼称を用いることがあったことを明らかにした。元特攻隊員が加害者として関わった犯罪が，こうした呼称と共に全国紙・地方紙において発信されたことで，「特攻くずれ」というレッテルが定着したものと考えられる。これについては，筆者が西村辰三におこなった聞き取りからもうかがえる[29]。自身が特攻隊員であったがために冷遇された経験があるか質問したところ，彼は次のように語った。

西村「僕はそういう感じを受けたことはないけどね。うん。せやけど，まあ確かにな，こういうことを世間で言うてたことは知ってる。あの，「予科練くずれ」とか。ほいで，なんか事件を起こしたら「予科練くずれやった」とかな。そ

んなんは新聞に載ったことはあってね。せやから，僕ら自身は，僕自身は，そういうことを自分で意識したとかそういうことはない。けど，なかにはいるやろなあ。」

筆者「そうやって，「予科練くずれ」って，「予科練が悪いことしたんだ」っていうふうに言われることに対して思うことはなかったのですか。腹立たしいとか」

西村「いや，僕自身はそういう感じにはとらえなかったね。一時ね，マスコミやなんかしらんけど，「予科練くずれ」っちゅうことを新聞にちょこちょこ書いてたりしたけどな。せやけど，僕自身はそりゃ，人はいろいろやと思ってたし，うん。」

西村は，「予科練くずれ」という言葉が新聞の事件報道において用いられるものだったと言い，あくまでも自身と距離を置いた呼称としてとらえている。前出の松下[1985]や神坂次郎［1995］，伊勢田達也［2001］なども，「特攻くずれ」という言葉について，戦時中は特攻隊員を賛美したマスコミが，戦後手のひらを反すかのように使っていた言葉として追憶する。

ただし，この時代の報道を取り上げる際には，GHQ/SCAPによる検閲が課されていたことを忘れてはならない。実際，1947年に作家の坂口安吾が執筆した「特攻隊に捧ぐ」という評論は，事前検閲にて「Militaristic」（軍国主義的）という理由で公開禁止処分が下された。このように，GHQ/SCAPによって特攻隊の価値を肯定的に論じる言説は厳しく禁じられた［山本武則他編2010：p.265］。それによって相対的に，特攻隊を批判的に論じる言説が出回りやすい状況が整えられていたと考えられる。なお，検閲の問題は，新聞報道において1950年代前半で「特攻くずれ」の語が消滅する点とも併せて検討しなければならないだろう。

第2節　「異物」への非難と元特攻隊員の自責・沈黙

次に，「特攻くずれ」という言説が定着した社会的背景について検討したい。これについては，戦時中は「神」に近しい存在として報道され崇められていた元特攻隊員が罪人に転落するという現実が，同時代を共有する人々にあたえた衝撃と違和感が根底にあると考えられる。第2章第1節で取り上げた「異物としての復員兵」［川本 1992a］というキーワードを思い返されたい。戦時中，特攻隊員は「十死零生」，すなわち「必ず死ぬ」存在として捉えられていた。つまり，誤解を恐れずに言うならば，彼らは戦後社会にいるはずのない男たちだったのである。そのように考えると，「異物としての復員兵」のなかでも元特攻隊員たちはその最も極端な存在として，「野良犬」とまなざされたのであった。

そして，世間の人々にとってその「異物」は敗戦の無念と屈辱を晴らすためのはけ口になった。吉田は，「巨大な政治勢力と化して権力を乱用した軍部や特権的地位にあった軍上層部に対する反感・反発が，復員兵全体に向けられた」［2011：p.30］と指摘するが，すでに松下[1985]の事例でも見た通り，特に予科練帰りを含む元特攻隊員たちはその矛先となり，敗戦の「責任」を押し付ける格好の的となった。戦場や空襲で家族や身内を亡くしたものにとって，その悲しみと敗戦の虚無感をぶつけ，責任を求める存在が欲された。アジア・太平洋戦争において，象徴的な攻撃作戦であり，かつ「死ぬべき」存在であった彼らが，生きている。家族の戦死を経験した国民にとってその理不尽をぶちまける対象が，元特攻隊員であった。

花道柳太郎は，自らが出撃するときに両親あてに書いた遺書も，両親宛てにと戦友に託した封筒も，全て自らの手で焼却処分した。それは，自らが特攻隊員であったことを，両親にも隠しておくためだった[30]。現在，93歳になり記憶が薄れつつある花道柳太郎に代わって，妻のトシエは次のように語る（［ ］内は引用者による加筆）。

トシエ「［柳太郎が元特攻隊員だという話をするよ

うになったのは］平成15年ぐらいやな。［それまでは］なかったな。ずっと結婚しても私は［柳太郎が特攻隊員だったことを］知らなかった。国賊やと思われるからって［言ってなかった］。負い目感じてたらしいで。な？［生きたまま］戻って来たんでね。みなあんた，特攻へ行って皆死んできとらよ。［みな］亡くなったのに，ひとりだけ［生き残って］，なあ。生き延びたらな。負い目感じたらしいよ。［柳太郎に向かって］もう皆忘れてしもうたかな。そんなんよう言うんやったよ。」

柳太郎　（うなずく）

筆者が，「戦後，特攻隊員への風当たりは強かったのか」と尋ねた際には否定した柳太郎だが，戦後，自らが特攻隊員であったことをひた隠しにしてきた理由は，「国賊」と責められることを恐れたからだった。60年近くもの間，そのような判断を強いるような状況に置かれていたのである。何か具体的なきっかけがあったわけでもなく，そのような風潮を感じ取って隠してきたのだった。またトシエによると，柳太郎は自責の念から3年ほど前までは毎朝手を合わせて戦友たちに謝罪の言葉をつぶやき，悼んでいたという。

筆者が電話と手紙でやり取りを行ったMも，戦後は罵倒に耐えながら，児童養護施設で働いてきた[31]。彼は，戦中は教官として特攻隊員を送り出す立場にあり，弟の戦死により自身の出撃は免れた。送り出した特攻隊員たちや戦死した友人，弟への罪滅ぼしの気持ちが，命を守る仕事に就きたいという意志に直結した。

柳太郎やMのように，戦後自責の念に苛まれてきた元特攻隊員にとって，自らが生きていることは「申し訳のないこと」として戦後の生き方を規定してきた。彼らが元特攻隊員であったことは，当事者にとっては二重に苦しめられる問題であった。

このように元特攻隊員たちは，「特攻くずれ」という言葉でなくとも，自らの出自を表明すると排斥されるような雰囲気のなかで生きてきたのであった。元特攻隊員はそのような世論の暴力を免れようと，黙することを選択した者が多かった。敗戦後73年が経った今，元特攻隊員として戦後を生きた彼らの体験がようやく明らかになりつつあるといえよう。

柳井和臣も，就職にあたってそのような事態に直面した（［ ］内は引用者による加筆）[32]。

柳井「…やっぱりご遺族の方でも，戦後50年の間ね，ようするに海軍の「か」の字も言えないようなね，特攻の「と」の字も［言えない］…という風潮だったもんですからね」

筆者「その風潮はみんなが感じるものなんですか」

柳井「いやあ，それは知りませんよ。大会社ではね，海軍とか陸軍とか関係なしで。中小企業ではわかりませんけれどもね。まだ戦争を引きずってるのか，とかね，特攻隊くずれじゃないかとかね。そういうかたちで言われるわけです。その会社にとってプラスじゃないでしょう。」

筆者「実際にそういう言葉を浴びたわけではないんですか」

柳井「浴びて…浴びてはないけどね。もう雰囲気からわかりますよね。そんな特攻隊なんてね，経験したって言ったら［採用してくれる］会社少ないんですよ。それでどうだこうだ言ってて。何言ってるかっていうと，「負けたくせに」ってね。「犬死じゃないか」とかいうね」

柳井もまた，50年以上もの間，妻にも自らが特攻隊員であったことを隠していた。彼の就職に関する語りからは，元特攻隊員であるということを表明することが，経済的に不利益を被ることに直結する問題だったことが伺えよう。

このように，元特攻隊員たちは，戦後数十年間，自らが特攻隊員であったことを告白することが，自らの生を脅かすほどの圧力によって抑制されていた。その背景にあったのは「生き残ってしまっ

た」という自責の念だけでなく，生き残った彼らを排除しようとする世の中の冷たいまなざしであった。そのような社会のなかで，「特攻くずれ」という言葉は広く共有され，元特攻隊員たちへの侮蔑や批判的なまなざしとともに用いられるようになっていったのだろう。

第3節　反動としての「特攻くずれ」

ここまでみてきたような社会背景によって，「特攻くずれ」という言説がある程度社会に定着にした。本節ではさらに，その反動として元特攻隊員が「特攻くずれ」としてふるまう場合があったという点について言及したい。つまり，戦後元特攻隊員に向けられた排除の圧力が，彼らを「特攻くずれ」たらしめたということが考えられるのである。

これについては，第2章第2節で取り上げた事例から示すことができるだろう。「特攻くずれ」は，しばしば象徴的な「くずれスタイル」で街を歩いた。戦中には英雄の象徴であった白いマフラー，飛行服，航空長靴というスタイルは，戦後には「野良犬」の象徴となり，人々は彼らを冷遇し，侮蔑し，排除した。『暮しの手帖』で特集された「特攻くずれ」の男の場合，故郷で冷遇されるなかで生まれた「俺のしてきたことが何がわるいんだ」というやり場のない葛藤が，「意地でも，この飛行服と長靴をぬぐものか」という言動につながった。このように「くずれスタイル」は，戦後社会から疎外された彼らの自尊心とアイデンティティの拠り所として発現したということができるだろう。

ここでもう一人，当事者による語りを紹介したい。「特攻くずれ」を自称し，戦後は航空自衛隊に入隊した経歴を持つ永末千里は，自著『特攻くずれ自衛隊に入る』のなかで次のように語る[33]。

> 戦争中は，国民から畏敬の念をもって迎えられていた特攻隊員も，敗戦と同時にその霊験を失い，そのうえ，「特攻隊員は犬死であった」としか評価されない世の中へと急変したのである。その鬱憤を晴らすため，非社会的な言動を誇示したり，権威に対して反抗的な態度をとることで自己顕示を行っていた。そして，それがさらに世間の同情を失うという悪循環を繰り返す結果となっていた。
>
> これは，一度生死の瀬戸際を体験した者の開き直りである。「俺たちは，死ぬことなんか怖くないんだ！　矢でも鉄砲でも持ってこい！」といった強がりである。私とても例外ではなく《特攻くずれ》である。若干十八歳といえども，帝国海軍の航空機搭乗員ともなれば，男一通りの遊びは経験している。毎日のように隣の町まで出かけては，夜遅くまで遊びまわっていた［1995：pp.2-3］。

永末もまた，「くずれスタイル」をまとった一人である。彼にとって，「特攻くずれ」の言動は自己顕示でありながら，虚勢でもあった。「生死の瀬戸際」を経験した彼は，自分たちの犠牲を「犬死」と無価値化する世論に対し，自らの存在をかけて抗った。排除の圧力に押しつぶされないように，自尊心を保ったまま自らの生を主張するために，意図的にそのような言動をとった。このように，「特攻くずれ」としてふるまうことは，彼らにとっては自分の身を守り生き抜いていくための手段として発揮されたことが考えられる。

しかしながら，第2章第2節でも述べたように，「くずれスタイル」が定着することが，皮肉にも「特攻くずれ」を装う闇屋や強盗が出現する事態を招いた。このような勢力の加担もあって，「特攻くずれ」という言説はますます世間に浸透し，当事者たちを沈黙や反動に駆り立てるような循環が生まれていったことが，これまでみてきた事例から明らかとなるだろう。

以上本章では，戦後日本で「特攻くずれ」という言説が生まれ，拡散され，共有されていった要因を筆者が収集した事例から考察した。「特攻くずれ」という言説自体は占領期の新聞報道に端を発するものの，それが全国的に浸透していった背景には元特攻隊員を排斥するような国民感情の昂揚があったことが事例からうかがえる。復員軍人のなかでも，戦争で「必ず死ぬ」とされた元特攻隊員

が戦後社会に生きているという事態は，社会には違和として映った。そして彼らが「軍神」から「罪人」へと転落する状況は，国民にとって衝撃的かつ受け入れがたい現実であり，敗戦のはけ口として冷遇された。そしてそのような排除の圧力は，戦後数十年間にわたって元特攻隊員たちの生を脅かしたのであった。彼らは，生き残ったことへの自責の念にも駆られながら，長年沈黙を強いられてきたのである。また，排除の圧力に抗うために意図的に「特攻くずれ」の言動をとる者がいたことも明らかとなった。

おわりに

本論文全体を通して，戦後日本における「特攻くずれ」という言説に焦点を当て，元特攻隊員がどのように生きてきたのかをみてきた。

まず第1章では，占領期の新聞報道から，元特攻隊員がいかなる文脈で取り上げられてきたのかをみた。敗戦からまもなくして，復員軍人は「新生日本」の担い手として期待され，そのなかでも特に学徒や元特攻隊員はその象徴として望まれた。実際に，特攻基地が農場や漁場，学校，文化的施設などに「再生」する様子には，軍国主義からの脱却と「新生日本」が重ねられ，特攻基地の存在意義の塗り替えが意図的におこなわれた。元特攻隊員個人については，彼らが新たに生業を見つけて暮らしている姿や，学業，商売に熱心に励んでいる様子に焦点が当てられ，彼らの「健全な社会復帰」がアピールされるとともに，平和の担い手として表象された。

その一方で，同時期に現れたのが「特攻くずれ」「予科練くずれ」という呼称であった。元特攻隊員が犯罪者に転落する状況は，全国紙・地方紙のいずれにおいても断続的に報じられたことがわかった。そこで第2章では，占領期の雑誌等において，「特攻くずれ」をめぐってどのような言説が展開されていたのか，3つの項目から分析した。まず，第1節では元特攻隊員に対して向けられた「野良犬」という比喩に着目し，戦後社会において「特攻くずれ」が復員兵のなかでも最も極端な「異物」としてまなざされていたことを明らかにした。また，「特攻くずれ」は闇屋と結びつく存在として表象されたことがわかった。次に第2節では，「特攻くずれ」「予科練くずれ」に対する排除の圧力を示した。彼らのなかには戦後に学校復帰した者も多かったが，一方で，「不良」として学校現場で疎外される者もいた。また，飛行服，航空長靴，白マフラーという象徴的な「くずれスタイル」が，こうした排除の圧力の反動として発生したものであることを示した。そして第3節では，「特攻くずれ」に対し，彼らの転落を嘆き同情する者がいたことを明らかにした。

第3章では，第1章，第2章で挙げた事例に基づいて，「特攻くずれ」が言説化された要因を検討し，そのような社会を生きた元特攻隊員の想いについて考察した。元特攻隊員の手記や当事者への聞き取りから，「特攻くずれ」という言説は，全国紙・地方紙による複数の報道を契機として広まったと考えられる。戦時中には神として尊崇された特攻隊員が，敗戦を機に，戦争神経症の影響や貧困などを理由に犯罪者に転落していく過程を同時代的にまなざしてきた国民に大きな落差を感じさせたと考えられる。そして元特攻隊員たちは敗戦の象徴として冷遇され，排除された。筆者が元特攻隊員におこなった聞き取り調査からは，そのような風潮が戦後数十年間にわたって元特攻隊員たちの脅威として彼らに沈黙を強いたことが明らかとなった。また，排除の圧力に抗うために意図的に「特攻くずれ」の言動をとる者も現れたのだった。

しかしながら，研究を進めていくなかでいくつか課題も見えてきた。まずは，「特攻くずれ」がいつ，どこに消えたのかという問題である。前述したように，「特攻くずれ」という言葉は，新聞や雑誌においては1950年代前半から見られなくなっていく。これは占領期の終了と時期が重なることから，「独立」という時機に焦点を当て，その後を含めた元特攻隊員たちの戦後史にも目を向ける必要がある。

次に，元特攻隊員の戦後の自殺の問題である。本論文では触れなかったが，1947 年 8 月 29 日の『南日本新聞』において，「元特攻隊員服毒自殺？」という記事が掲載されている。記事によると，鹿児島県のある神社の桜の木の下で男の変死体が見つかり，「将校用ズボンをはき，財布（現金八百余円在中）の裏には元特攻隊記章が縫いつけてある」のだという。桜は，戦時は特攻隊員の命を形容するモチーフとして使われた。この者は，桜の木の下で，自らが特攻隊員であったことを意図的に示すような形で死んだのだろう。筆者は，M との電話のやり取りにおいても，戦後に自殺した特攻隊員がいたことを聞いた。特攻隊員の「転落」が「特攻くずれ」の言説に収斂されていくなかで，自責の念や戦争神経症に苦しんで自殺した者の存在は不可視化されてきたのではないだろうか。

そして，「特攻くずれ」の覚せい剤中毒，アルコール依存症の問題である。戦時中，向精神薬として覚せい剤を投与され，士気を高めるために 10 代のうちから飲酒させられていた元特攻隊員たちのなかには，戦後その中毒症状に苦しんだものがいたことが考えられる。これについては，「特攻くずれ」が戦後社会の「ならず者」として議論されてきたことで埋もれてきた問題でもあるだろう。

このような問題について検討することを今後の課題とし，元特攻隊員を含む復員軍人の戦後史に迫りたい。

<謝辞>

本研究を進めるにあたり聞き取り調査を快諾してくださった柳井和臣さん，中村五郎さん，西村辰三さんと娘の西村恵里さんご夫妻，花道柳太郎さんと妻の花道トシエさん，電話と手紙にてやり取りをしてくださった M さんに，心より御礼申し上げます。また，指導教員の北村毅先生，副指導教員の北原恵先生には 1 年以上にわたって熱心なご指導を賜りました。そして，松永健聖さん（日本学専修 3 年生），野上貴裕さん（哲学・思想文化学専修 4 年生）をはじめとする文学部の友人たちには，幾度となくあたたかい助言をいただきました。筆者を支えてくださったすべての方に，この場を借りて深謝いたします。

注

[1] 実際は海軍艦船などによる「水上特攻」も行われ，航空特攻に匹敵する若者が死んだ［栗原 2016：p. iii］。

[2] 中村五郎は 1929 年生まれ，新潟県出身である。1944 年 4 月に特別幹部候補生として大刀洗陸軍飛行学校に入隊し，1945 年 5 月に特攻隊の指名を受け，振武 414 飛行隊員となった。現在は新潟県内で自営業を営んでいる。2018 年 3 月 25 日，新潟空港内レストランにて聞き取りを行った。

[3] 「予科練」とは，海軍が 1930 年から開始した「海軍飛行予科練習生」の略称である。海軍はこれによって飛行機の搭乗員を若いうちから育成して熟練させようとした。終戦までの 15 年間で，試験で選抜された 14 歳から 17 歳の少年 24 万人が入隊し，そのうちの 2 万 4 千人が飛行練習生を経て戦地に赴いた。死者は 1 万 9 千人にのぼり，なかには特攻隊として出向いたものも多かった。［予科練平和祈念館公式ホームページ「予科練とは」http://www.yokaren-heiwa.jp/02yokarentoha/index.html （2018 年 12 月 22 日最終閲覧）］

[4] 西村辰三は 1928 年生まれ，京都府出身である。1943 年に海軍飛行予科練習生に入隊し，1944 年に博多海軍航空隊に配属された。戦後は建築業を営んだ。2018 年 4 月 22 日，京都府内の自宅にて聞き取りを行った。

[5] 例えば，海軍報道班員の小野田政によると，鹿屋飛行場には，1945 年 5 月ごろ，白昼から酒を浴び，抜刀して街を歩き，娘たちを襲う日の丸ネジリの者が現れていたという［1971：pp.39-40］。また，生田淳は，1945 年 5 月に知覧基地で実施された特攻隊員への心理調査から，特攻隊員の三分の一が特攻を希望していなかったことを明らかにした［1977：pp.209-213］。

[6] 本論文においては，第 2 章第 2 節で「予科練くずれ」に焦点を当てるが，言説としてはこれも「特攻くずれ」に含まれるものとして扱う。

[7] なお，1945 年から 1952 年までの間の各紙年間発行部数の平均は，『朝日新聞』東京版が 1447055 部，『読売新聞』東京版が 1802151 部，『毎日新聞』東京版が 1600841 部である［『朝日新聞販売百年史：大阪編』，『読売新聞百二十年史』，『毎日新聞七十年史：1872-1972』に掲載されている値から筆者が平均を算出］。また，『朝日新聞記事データベース　聞蔵Ⅱ』（朝日新聞社），『読売新聞有料データベース　ヨミダス歴史館』（読売新聞社），『毎日新聞記事データベース　毎索』

（毎日新聞社），『２０世紀メディア情報データベース』（２０世紀インテリジェンス研究所）等オンラインデータベースを適宜参考にした。

[8] プランゲ文庫とは，1945年から1949年の間に日本で出版された刊行物を収蔵するコレクションである。1949年9月の検閲制度終了，同年11月のCCD（民間検閲部隊）の廃止に伴い，これら資料群の歴史的価値に注目したゴードン・F・プランゲが図書や新聞，雑誌等をアメリカのメリーランド大学に移管した。

[9] 本土に配備されていた部隊は軍隊の自壊現象が始まっていたこともあって，1945年中にはほとんどの部隊が復員を終えた。しかし，海外部隊は船舶不足などにより復員に最大で2年ほど要したほか，満州・南樺太・千島列島などでソ連軍に降伏した将兵や一部民間人はシベリアなどに送られ強制労働に従事させられたため，復員が大幅に遅れた[吉田 2011：pp.21-22]。

[10] 柳井和臣は1922年生まれ，山口県出身である。1943年10月に学徒出陣により海軍第14期飛行予備学生として入隊。1944年5月に特攻隊員として出撃するものの，天候不良により帰還した。戦後は民間企業に勤めた。2018年3月17日と2018年4月28日，広島駅周辺や県内の自宅にて聞き取りを行った。

[11] 「兵の心は一億の心：他人事ではない：優しい思遣りで迎へよう」『朝日新聞』東京，朝刊，第2面，1945年8月24日

[12] 「復員輸送は真心で」『朝日新聞』東京，朝刊，第2面，1945年8月25日

[13] 「よくやった・諸君：素晴らしい再出発を期待：文相，全学徒を激励」『朝日新聞』東京，朝刊，第2面，1945年8月18日

[14] 酒巻和男は，昭和時代の軍人，経営者。1918年生まれ。1941年海軍少尉。特殊潜航艇乗組員となり真珠湾攻撃に参加。潜航艇が座礁して太平洋戦争での日本人最初の捕虜となる。アメリカの収容所にはいり，1946年帰国。
ジャパンナレッジLib『日本人名大事典』
https://japanknowledge-com.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/lib/display/?lid=5011074108810 （2019年1月1日最終閲覧）

[15] 同月13日には『朝日新聞』の「声」欄にて，1950年7月19日には『読売新聞』の「気流」欄にて，読者の声に基いて「特攻くづれ」が特集されているが，これについては第2章で扱うものとする。

[16] 1946年2月7日には，幣原喜十郎総理大臣が国民に向かって復員軍人への「温かいいたわり」を求めている。なかには自暴自棄に陥り「邪の道に転落する者」があること等に言及したうえで，「皆さんが一層温い心をもって慰め，いたわり，励まし，助け合って，一緒に健賞な新日本の建設に邁進するやうに心がけて頂きたいのであります」と呼びかけている［『総理談（幣原内閣総理大臣）』内閣総理大臣官房総務課作成，国立公文書館所蔵，1946］

[17] この記事では主に青少年の非行が蔓延していることが懸念されている。

[18] 個人情報保護の観点から，関係者の名は伏せるものとする。

[19] メタンフェタミン系の覚せい剤（1941年に「ヒロポン」として大日本製薬から販売された）は，一時的な全能感を与えることが戦闘に有用であるため，「突撃錠」などという名称で特攻隊員に与えられた。1954年6月1日の『朝日新聞』の社説「天声人語」においても，若い特攻隊員や学徒挺身隊に軍が注射したり飲ませたりした覚せい剤のストックが，敗戦と同時に大量に街に流れ，1954年現在で95万人から150万人がヒロポン中毒となっていると懸念されている。

[20] 山口県の警察雑誌にも，県内で発生した強盗強姦殺人事件について捜査の詳細が特集されている。それによると，逮捕された容疑者は元海軍特攻隊員で，「戦後は土工や電工等の仕事をして各地を徘徊していた不良徒であった」という[『防長警友』：pp.20-22]。

[21] このほかにも，陸軍特攻隊「第22振武隊」の一員として出撃するも不時着により帰還した大貫健一郎は，復員後に仕事が見つからず「まるで野良犬のように焼け跡をさまよいました」と当時のことを振り返る［2018：p.277］。

[22] 喪中の家の飼犬。不幸があった家では悲しみのあまり犬の世話も忘れるので，やせおとろえている。一説に，宿なしの犬。また転じて，見る影もなくやつれて元気のない人のたとえ。
ジャパンナレッジLib『日本国語大辞典』
https://japanknowledge-com.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/lib/display/?lid=200202742755u8e2S8bq （2018年12月29日最終閲覧）

[23] 童門冬二は，小説家。1927年生まれ。1944年志願して茨城県の海軍土浦航空隊に入隊。戦後は東京都知事の美濃部亮吉のもとで幹部として都政運営に関わった。
ジャパンナレッジLib『日本大百科全書（ニッポニカ）』https://japanknowledge-com.remote.library.osaka-u.ac.jp:8443/lib/display/?lid=1001000305361（2019年1月1日最終閲覧）

[24] 神保威［1985］も，自身が率いる予科練の隊列に対し

て，民衆が「お前たちがもっと一生懸命，戦闘をしなかったから負けたのだ」と罵倒し石を投げつけてきたという経験を持つ。

[25] 永末千里は，「終戦後まもなく《特攻くずれ》という言葉がささやかれ始めた。確たる定義のある用語ではない。敗戦で復員した特攻隊の生き残りで，社会的規範を無視し，平気で常軌を逸した行動をとる連中をこう呼んでいた」と述べたうえで，「私とても例外ではなく，正真正銘の《特攻くずれ》である」[1995：pp.2-3]と自称している。永末については第 3 章第 3 節でも取り上げる。

[26] 「声：特攻くづれ」『朝日新聞』東京，朝刊，第 2 面，1946 年 1 月 13 日

[27] 「気流：特攻隊くずれ」『読売新聞』東京，朝刊，第 2 面，1950 年 7 月 19 日

[28] 「編集手帳」『読売新聞』東京，朝刊，第 1 面，1950 年 7 月 10 日

[29] 「はじめに」にて既出。2018 年 4 月 22 日，京都府内の自宅にて聞き取りを行った。

[30] 花道柳太郎は，1925 年生まれ，和歌山県出身である。1944 年には陸軍特別幹部候補生として宇都宮陸軍飛行学校に入校し，1945 年 5 月に特攻隊として出撃するも，機動部隊を発見できず帰還した。戦後は公務員として和歌山県で勤務した。2018 年 5 月 27 日，和歌山県内の自宅にて聞き取り調査を行った。

[31] M は，1922 年生まれ，三重県出身である。1943 年に学徒出陣で熊谷陸軍飛行学校に入校し，1945 年 1 月に特攻隊として出撃が予定されるも，弟の戦死により見送られた。戦後は戦争孤児の支援施設，乳児院，児童養護施設などで働いた。

[32] 第 1 章第 1 節にて既出。2018 年 3 月 17 日と 2018 年 4 月 28 日，広島駅周辺や県内の自宅にて聞き取りを行った。

[33] 永末千里は，1927 年生まれ，福岡県出身である。1943 年に第 12 期甲種飛行予科練習生として鹿児島海軍航空隊に入隊し，1945 年 3 月に特攻要員となった。1955 年から 1977 年まで航空自衛隊に勤務した。

参考文献一覧

浅井利勇編著 1993『うずもれた大戦の犠牲者：国府台陸軍病院・精神科の貴重な病歴分析と資料』国府台陸軍病院精神科病歴分析資料・論文記念刊行委員会

朝日新聞社 1975『アサヒグラフに見る昭和の世相：(5)』

――― 1976『アサヒグラフに見る昭和の世相：(6)』

朝日新聞大阪本社販売百年史編集委員会編 1979『朝日新聞販売百年史：大阪編』朝日新聞社

生田淳 1977『陸軍航空特別攻撃隊史』ビジネス社

伊勢田達也 2001『翔べなかった予科練生』あすなろ社

大久保房男 1999『人間魚雷搭乗員募集』光人社

大貫健一郎・渡辺考 2018『特攻隊振武寮：帰還兵は地獄を見た』朝日新聞出版

大橋鎮子 1959「ある日本人の暮し：25：特攻くずれ」『暮しの手帖』（暮しの手帖社）

小倉史 2012「彷徨えるアイデンティティ：松竹大船喜劇と<復員兵>イメージ」『愛知淑徳大学論集』（メディアプロデュース学部編）第 2 号

大橋鎮子 1959「ある日本人の暮し 25：特攻くずれ」『暮しの手帖』第 51 号（暮しの手帖社）

小野田政 1971「生きながらの神々」『大平洋戦争ドキュメンタリー：第 23 巻：神風特攻隊出撃の日』（今日の話題社）

川本三郎 1992a「今ひとたびの戦後日本映画：3：三船敏郎と復員兵」『世界』第 569 号（岩波書店）

――― 1992b「今ひとたびの戦後日本映画：4：帰ってきた男たち：復員兵を描く映画」『世界』第 570 号（岩波書店）

神坂次郎 1995『特攻隊員の命の声が聞こえる』PHP 研究所

栗原俊雄 2016『特攻：戦争と日本人』中公新書

清水寛 2006『日本帝国陸軍と精神障害兵士』不二出版

神保威 1985「石もて打たれし終戦時の思い出」『海軍第十四期会会報縮刷版』（海軍飛行専修予備学生第十四期会）

童門冬二 2000「"予科練くずれ"が，クモの糸を待つ日々（特集 人生で「地獄」を見た時）」『新潮 45』第 19 巻 8 号（新潮社）

永末千里 1995『特攻くずれ自衛隊に入る』海鳥社

中村江里 2017『資料集成：精神障害兵士「病床日誌」：編集復刻版：第 3 巻：新発田陸軍病院編』六花出版

――― 2018『戦争とトラウマ：不可視化された日本兵の戦争神経症』吉川弘文館

中村五郎 2004『自分史：あの日，あの時：わが歩みし七十五星霜』非売品

西川吉光 2009『特攻と日本人の戦争：許されざる作戦の

実相と遺訓』芙蓉書房出版
日本図書センター 1987『朝日新聞縮刷版：昭和20年下半期：復刻版（1945）』
――― 1987『朝日新聞縮刷版：昭和21年上半期：復刻版（1946）』
野間省一 1979『昭和萬葉集：巻七』講談社
福間良明 2007『殉国と反逆：「特攻」の語りの戦後史』青弓社
細渕富夫・清水寛編 2016『資料集成：精神障害兵士「病床日誌」：編集復刻版：第1巻：神経衰弱編：1』六花出版
――― 2017『資料集成：精神障害兵士「病床日誌」：編集復刻版：第2巻：神経衰弱編：2』六花出版
毎日新聞社史編纂委員会 1952『毎日新聞七十年』毎日新聞社
松下竜一 1985『私兵特攻：宇垣纏長官と最後の隊員たち』新潮社
森本忠夫 2005『特攻：外道の統率と人間の条件』光人社
山本明 1986『戦後風俗史』大阪書籍
山本武利 2010『占領期雑誌資料大系：文学編Ⅱ：第二巻』岩波書店
吉田裕 2011『兵士たちの戦後史』岩波書店
――― 2017『日本軍兵士：アジア・太平洋戦争の現実』中央公論社
吉本隆明 1957「「記念碑」・「奇妙な青春」批判－「特攻くずれ」と「党員くずれ」の問題」『近代文学』第12巻6号（近代文学社）
読売新聞社編 1994『読売新聞百二十年史』読売新聞社
渡辺清 1983『砕かれた神：ある復員兵の手記』朝日新聞社

【新聞記事】
本文中に記載。なお、『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』以外はブランゲ文庫資料を参照した。

【ブランゲ文庫雑誌】
※すべて国立国会図書館憲政資料室所蔵のブランゲ文庫資料
阿部真之助他 1947「世相よも山ばなし」『新文庫』第1号（鉄道弘済会新文庫社）
荒木巍他 1946「復員青年の運命」『文明』第1巻第6号（文明社）
坂口安吾 1947「特攻隊に捧ぐ」『ホープ』第2巻第2号（実用之日本社）
高橋良甫 1946「特攻隊員」『巷の声』第9号（太平洋社）
高松棟一郎 1947「夏日随想」『国民講座』第556号（財産法人社会教育協会）
水津英男 1949「玖北寒村の殉職」『防長警友』5月号（山口県警察部教育課）
安田正三 （出版年不明）「闇屋と特攻隊員」『ひろしま』第2巻第2・3号
読売新聞社「小咄：特攻くづれ」『月間読売』第4巻第3号（読売新聞社）

【オンラインデータベース】
『２０世紀メディア情報データベース』（２０世紀インテリジェンス研究所）
『朝日新聞記事データベース　聞蔵Ⅱ』（朝日新聞社）
『読売新聞有料データベース　ヨミダス歴史館』（読売新聞社）
『毎日新聞記事データベース　毎索』（毎日新聞社）